

編集後記

今号では論文2本、研究ノート3本、エッセイ2本、報告3本を掲載することができました。香港、日本、台湾、中国大陸と各地から教育だけではなく文学、社会学、言語学にまたがる幅広い日本研究論稿をお送りくださった投稿者の皆様にあらためて感謝申し上げます。

香港は昨年6月の逃亡犯条例改正案抗議運動から現在のコロナウイルス対応まで激動の流れの渦中にあります。2019年10月にはマスク着用を禁じる覆面禁止条例が出されましたが今年2月からは街中でマスクをしていない人は見なくなりました。みなが感染を防ぐため手を頻繁に洗い、消毒液を吹きかけ、社会的距離を保つよう家に籠っています。大切な人々と一緒に過ごす時間が持てる一方、家族や親戚を越えて人々が集うことは難しくなっています。学校の授業はオンラインに移行し予想以上の成果を挙げている一方、ネット環境やコンピュータ機材が整っていない家庭、狭い部屋で兄弟姉妹と一緒に学ぶ子どもたちには厳しい日々が続いています。ネットに溢れる情報洪水のなかで専門家の言葉をどう信じるべきなのか、友達や家族に健康に関する情報をどう伝えるべきなのか、言葉のつかい方に神経を張り巡らさざるを得ない状況です。言葉のつかい方だけでなく、友達と会ってよいのか、会議を開いてよいのか、食料品や消毒薬をどのくらい買ってよいのか、マスクをいつ外してよいのか常に判断が求められます。いままで気にも留めない日々の営みが、判断を誤れば自分だけでなく周囲の人々に影響が及ぶ緊張感に包まれています。この状態は程度の差こそあれ個人にとって重圧でしょう。コロナウイルスはワクチンが完成すればいつか封じ込められるでしょうが、その時に私たちはまたリラックスして自由に言葉をつかえるようになるのでしょうか、マスクで隔絶された社会的距離はまた以前のように縮まり、家族を越えたコミュニティの結びつきが戻って来るのでしょうか。

本年10月にマカオ大学で開催予定だった日本語教育国際研究大会は来年へ延期となりました。大会テーマは「つながる多様性、ひろがる可能性」であり慶應義塾大学の平高史也先生と香港大学のLiz Jackson先生をご招待し、日本語教育がどう人々を結び付け平和に貢献できるのか討議していく予定です。その時にはコロナウイルスの影響が弱まり、マカオや香港がその特徴であるグローバルな結びつきと市民同士の助け合いの心を取り戻しているよう切に願うばかりです。

最後に毎年の事となりますが、研究の合間を縫って投稿作品を審査して下さった外部査読者の先生方、原稿の誤字脱字を丁寧に指摘して下さった編集委員の皆様へ感謝申し上げます。日本学刊を期日通りに刊行することができるのは皆様が貴重なお時間を割いて、無償でご協力してくださっているおかげです。また香港日本語教育研究会シャノン・ウォン氏が厳しい出版スケジュールの中、レイアウトや査読の連絡を担当してくれたおかげで無事出版に至っていることを感謝と共にここに記します。

編集委員長 青山 玲二郎

2020年3月吉日